

Summa Archaeologica

稻垣足穂大全

I

思潮社

稻垣足穂大全Ⅰ

定價 貳千六百圓

發行 一九六九年六月三〇日

一九七二年一〇月二五日 三版

著者 稻垣足穂

發行所 株式會社現代思潮社 東京都文京區小日向一―二四―八

電話(九四三)四四〇六(代表) 振替／東京七二四四二

郵便番號 一一二

© Taruho Inagaki

本文印刷 東京創文社

裝本印刷 形成社

製本 橋本製本所

製函 石黒紙器製作所

稻垣足穂大全Ⅰ

目次

一千一秒物語 2

月から出た人 星をひろった話 投石事件 流星と格闘した話 ハーモニカを盗まれた話 ある夜倉庫のかけで聞いた話 月とシガレット お月様とけんかした話 A MEMORY A PUZZLE A CHILDREN'S SONG 月光鬼語 ある晩の出来事 IT'S NOTHING ELSE SOMETHING BLACK 黒猫のしっぽを切った話 突きとばされた話 はねとばされた話 押し出された話 キスした人 霧にだまされた話 ポケットの中の月 なげいて帰った者 雨を射ち止めた話 月光密造者 彗星を獲りに行った話 星を食べた話 AN INCIDENT IN THE CONCERT TOUR DU CHATELAIN 星? 花火? ガス灯とつかみ合いをした話 自分を落してしまった話 星でパンをこしらえた話 星におそわれた話はたして月へ行けたか? 水道へ突き落された話 月をあげる人 THE MOONMAN コロアのいたずら 電灯の下をへんなものを通った話 月のサーカス THE MOONRIDERS 煙突から投げつされた話 A TWILIGHT EPISODE 黒猫を射ち落した話 コーモリの家 散歩前 THE BLACK COMET CLUB 友だちがお月様に愛った話 見てきたようなことを云う人 AN INCIDENT AT A STREET-CORNER A HOLD-UP 銀河からの手紙 THE WEDDING CEREMONY 自分によく似た人 真夜中の訪問者 ニュヨークから帰ってきた人の話 月の客人 どうして酔よりさめたか? A ROCK ON A PAVEMENT 黒い箱 月夜のプロジェクト 赤鉛筆の由来 土星が三つ出来た話 お月様をたべた話 お月様が三角になった話 星と無頼漢 はたしてビールびんの中に彗星がはいっていたか? どうして彼は喫煙家になったか? A MOONSHINE

星を造る人 42

星を売る店 58

「星遣いの術」について 74

緑色の円筒 84

「タルホと虚空」 92

天体嗜好症 96

童話の天文学者 108

似而非物語 114

彗星倶楽部 128

螺旋境にて 140

私の宇宙文学 148

一 ボン彗星の寂光土

二 果して月へ行けたか？

三 タルホと虚空

四 THE SPIRAL CITY

横寺日記 172

僕の「ユリーカ」 194

緒言 彼らはいかにあったか

第一部 ド・ジッター宇宙模型

第二部 ハップルIIヒューメーソン速度距離関係

古典物語 274

未来派へのアプローチ 312

ロバチェフスキー空間を旋りて 364

白鳩の記 390

飛行機の哲理 404

飛行機物語 410

フアルマン 436

ライト兄弟に始まる 444

第一章 北カロライナ州キティホーク

第二章 雲雀くらいの高さで

第三章 わたしのモデルプレーン

第四章 菜の花と飛行機との格闘

稲垣足穂大全年譜 松村實 621

Summa Tarchologica

一千一秒物語

さあ皆さん どうぞこちらへ！ いろんなタバコが取り揃えてあります どれからなりとおためし下さい

月から出た人

夜景画の黄いろい窓からもれるギターを聞いていると 時計のネジがとける音がして 向うからキネオラマの大きなお月様が昇り出した

地から一メートル離れた所にとまると その中からオペラハットをかむった人が出てきて ひらりと飛び下りた オヤ！ と見ているうちに タバコに火をつけて そのまま並木道を進んで行く ついてゆくと 路上に落ちている木々の影がたいそう面白い形をしていた そのほうに氣を取られたすきに すぐ先を歩いていた人がなくなった 耳をすましたが 靴音らしいものはいっこうに聞えなかった 元の場所へ引きかえしてくると お月様もいつのまにか空高く昇って静かな夜風に風車がハタハタと廻っていた

星をひろった話

ある晩黒い大きな家の影に キレイな光ったものが落ちていた むこうの街かどで青いガスの眼が一つ光っているだけだったので それをひろって ポケットに入れるなり走って帰った 電燈のそばへ行ってよく見ると それは空から

おちて死んだ星であつた　なんだ　つまらない！　窓からすててしまった

金曜日の夕がた　帽子店へはいると　突き当りの大鏡にネクタイをえらんでいる青年の姿が映つた　その拍子に先方も鏡を見た　自分と青年の眼とがカチ合つた　青年はズカズカと近づいてきて　自分の肩ごしに云つた

「君」

「なに？」

と横を向いたまま答えると

「水曜日の夜をおぼえているか」

と云いかけた

「そんなことはね……」

と答えると

「そんなことではないよ！」

青年はたいへんな権幕けんまくでどなった　ガラス戸がギーと開く音が聞えただけで　自分は街のアスファルトの上へかち飛ばされた

投石事件

「今晚もぶら下つていやがる」

石を投げつけるとカチン！

「あ痛た 待て！——」

お月様は地に飛び下りて追っかけてきた ぼくは逃げた 垣を越え 花叢を横切り 小川をとび 一生懸命に逃げた 踏切をいま抜けようとする前をヒューと急行列車がうなりを立てて通った まごまごしているうちに うしろからグッとつかまえられた お月様はぼくの頭を電信柱の根元でガンといわした 気がつくとも 畑の上に白い霧もやがうろついていた 遠くではシグナルの赤い目が泣いていた ぼくは立ち上るなり頭の上を見て げんことを示したが お月様は知らんかおをしていた 家へ帰るとからだじゅうが痛み出して 熱が出た

朝になって街が桃色になった時 いい空気を吸おうと思って外へ出ると 四辻よつてのむこうから見覚えのある人が歩いてきた

「ごきぶんはどうですか 昨夜は失敬いたしました」

とかれが云った

たれか知らと考えながら家へ帰ってくると テーブルの上に薄荷水はつかすいが一びんのっていた

流星と格闘した話

ある晩オペラからの帰り途に 自分の自動車が街かどを廻るとたん 流星と衝突した

「じゃまするな！」

と自分は云った

「ハンドルの切りがたが悪い！」

と流星は云いかえした 流星と自分とはとっくんで転がった シルクハットがおしつぶされた ガス燈がまがって ポ

ブラが折れた 自分は流星をおさえつけた 流星はハネ返って 自分の頭を歩道のかどヘッソンと当てた
自分は二時すぎにボリスに助け起されて家へ帰ったが すぐにピストルの弾丸をしらべて屋根へ登った 煙突のかけ
にかくれて待っていた しばらくたつとシューといって流星が頭の上を通りすぎた ねらい定めてズドン！ 流星は大
弧をえがいて 月光に霞んでいる遠くのガラス屋根の上に落ちた
自分は階段をかけ下りて 電燈を消して寝てしまった

ハーモニカを盗まれた話

ある夕方 表へのお出合い頭に流星と衝突した
ハッと思うと そこにはたれもいなかった
おれはプラタナスの下を歩きながら考えた するとそれが流星であったかどうかはなかった が 衝突したはず
みに帽子を落した 帽子をしらべてみると ほこりがついていた おれは家の方へ走った 部屋にかけこむなりテーブ
ルの引出しをあけた ハーモニカがなかった

ある夜倉庫のかけで聞いた話

「お月様が出ているね」
「あいつはブリキ製です」
「なに ブリキ製だって？」
「ええどうせ旦那 ニッケルメッキですよ」(自分が聞いたのはこれだけ)

月とシガレット

ある晩 ムーヴィから帰りに石を投げた

その石が 煙突の上で唄をうたっていたお月様に当った お月様の端がかけてしまった お月様は赤くなって怒った

「さあ元にかえせ！」

「どうもすみません」

「すまないよ」

「後生ごしょうですから」

「いや元にかえせ」

お月様は許しそうになかった けれどもとうとう巻タバコ一本でかんにんして貰った

お月様とけんかした話

ある晩 ムーヴィの帰りにカフェーへ寄ると 隅ッこのテーブルで 大きなボールみたいな者がビールを飲んでいた
「なんだ 今夜はへんなぐあいだと思っていたんだ もう二時間もおくられている こんな所で飲んでいることがわかる
と 君はみんなからぶん殴られるよ」

自分がこう云うと ボールみたいなものは肩をそびやかして

「貴様の知ったことじゃない」

と云い返した

「それでいったい責任がすむんかい」

「すむもすまぬもあるものか お前こそ早く帰れ」

「なんだと……」

「文句があるか？」

そのままにして表へ出ようとすると やにわにうしろからビールびんが飛んできた それがカウンターの鏡に映ったので ひゅッと頭をかわすと びんは鏡に当ってパッシャン！

「卑怯な」

「なにを不良少年」

「何をちよこざいなお月様」

「さあこい！」

「やるか！」

お月様は短刀をひき抜いた 自分は椅子をふり上げた お月様の仲間と自分の友だちが取つくんで転んだ たれかがスイッチをひねった 真暗がり……椅子が飛んだ カーテンが落ちた 植木鉢が割れた 自分はお月様の横ッ腹をけりとばした お月様は自分の足を払った たれかが振り廻しているテーブルのかどが自分の頭に当たった フラフラとしたすきにお月様は逃げ出した 六連発を出してズドンズドンと撃った お月様は逃げてしまった

赤十字の自動車と警察の自動車が出てきて 怪我人をしらべた 自分がボリスに報告している時 東の地平線からお月様がふらふらしながら昇ってきた 自分は憲兵の鉄砲を借りて街上で片ひざを立てた ねらいをつけてズドン！

お月様はまっさかさまに落ちた

一同はバンザイ！ と云った

A MEMORY

物やわらかな春の月が中天にかかつて 森や丘や河が青くかすんでいました そして遠くのほうに岩山の背がほの白く光っていました

そこらじゅう一面に月の光がシンシンふりそそいで ずっと遠くの遠くの方から トンコロビービーと笛の音が聞えてきます それはなにか悲しげな なつかしい調子で 聞えるのか聞えないのかわからないくらい 微かに伝わってきます 耳を澄すと その笛の音につれて 恨むような 嘆くような声が なにか歌っているようですが 何を云っているのかちっとも判りません

トンコロビー……ビー……

笛の音がすると 月の光がまたひとしきり降りこぼれてきます
すると

「たぶんこんな晩だろうよ——」

どこからかこんなつぶやき声がしました

「え? どうしたのが」

とわたしはおどろいて問い返しましたが 声は何にも答えません そして相変らず月の光がシンシン降っているだけでした

すると又 どこからともなくさっきのつぶやきが 投げやるように 悲しげに こんどは少うし腹を立てているような調子で聞えました

「たぶん こんな晩だったろうよ——」

「えっどうしたのが？」

わたしはあわてて問い返しました　けれども声はもう答えようとしませんでした

.....

わたしは気がついて足もとから石をひろい上げました　しかしむこうへ投げつけるまえに　なにかがっかりしたふう
に落してしまいました

青い月夜で　山や丘や森が夢のようにかすんでいました

トシコロビー.....ビー.....

A PUZZLE

—— ツキヨノバンニチヨウチヨウガトンボニナッタ

—— え？

—— トンボノハナカンダカイ

—— なんだって？

—— ハナカミデサカナヲツッタカイ

—— なに　なんだって？

—— ワカラナイノガネウチダトサ

A CHILDREN'S SONG

お月様でいっぱい

お月様の光でいっぱい

それはそれはいっぱい……

月光鬼語

真夜中頃に眼をさますと 裏庭にあたって只ならぬ人の声

「しからば拙者がたんだひとうち

「種が島にては近隣をおどろかすおそれあれば何卒^{なにぞ}これなる名弓にて

「いかにもさよう心得てござる

「それ 御油断めさるな

「委細承知——

ビュン！ 弦^{つる}を離れた矢の行方？

キャッ！ 中ぞらで悲鳴がすると 温室のガラス屋根へ真二ツに割れたお月様が墜^おちたけはい ハッと違って雨戸を
けって庭へ飛び降りたが 何事もない 真昼のような月夜だった

ある晩の出来事

ある晩 月のかげ射すリンデンの並木道を口笛ふいて通っているとエイッ！ ビュン！ たいへんな力で投げ飛ばさ

れた

IT'S NOTHING ELSE

A氏の説によるとそれはそれはたいへんな　どう申してよいか　びっくりするようなことがあります　それでおしま
い

SOMETHING BLACK

箱を開けると何か黒いものが飛び出した
ハッと思うまにどこかへ見えなくなった
箱の中はからっぽであった
それでその晩眠れなかった

黒猫のしっぽを切った話

ある晩　黒猫をつかまえて缺でしっぽを切るとパチン！　と黄いろい煙になってしまった　頭の上でキャッ！　とい
う声がした　窓をあけると　尾のないホーキ星が逃げて行くのが見えた

突きとばされた話

真夜中すぎに眼をさますと　電燈が消えたくらかりに　小さな青いものが光っている